

〔展 望〕

ポジティブな目標表象とネガティブな目標表象

—— “3次元の枠組み” の提唱 ——

村 山 航*

同じ意味内容の目標でも、その表象のされ方(目標表象)はポジティブ(P)な場合もネガティブ(N)な場合もある。この目標表象におけるP-Nという考え方は、多くの理論・領域で暗黙に取り入れられているが、その定義が不明確である。本論文では、目標表象に関し、基準の次元・達成の次元・結果の次元という、P-Nを極に持つ3つの次元からなる定義の枠組み(3次元の枠組み)を提唱する。そして、1)その枠組みによって従来の研究を捉え直し、2)各次元が行動制御過程に与える影響を明らかにし、3)その影響メカニズムを検討する、という3点を目的とした。その結果、達成目標理論・制御理論は基準の次元、目標フレーミング研究と制御焦点理論は達成の次元・結果の次元という次元で捉えられることが示された。また、これまでの実証研究では3次元間の交絡が多いため、次元の行動制御過程に与える影響は不明確であることが明らかになった。さらに、基準次元の行動制御過程への影響メカニズムとして、BAS・BISという脳内システムによる媒介が存在することが示唆された。一方、達成次元と結果次元の影響メカニズムとして、感情による媒介モデルが提案された。

キーワード：目標、接近-回避、制御焦点理論、達成目標理論、制御理論

はじめに

教育現場には、様々な形で「目標」が存在している。そして、生徒は、何らかの形でその目標に関与し、変化することが望まれている。しかし、同じ「学校には遅刻しないように来ましょう」という目標が与えられたとしても、受け手の受け止め方は、多様であると思われる。「遅刻して怒られそうだ」というネガティブな思いを抱きつつ、その目標に従おうとする場合もあるだろう。他方、「間に合えば先生が誉めてくれるかもしれない」とポジティブな気持ちを持ちながら、目標を達成しようとする場合もあると考えられる。同じような内容の目標でも、その時の状況要因や受け手の知識構造、そして目標を与える側の言い方のちょっとした違いで、目標の表象のされ方(目標の、記憶における保持の状態・形式。以下“目標表象”)はポジティブ(以下“P”)にもネガティブ(以下“N”)にもなりうる。そして、その目標表象におけるP-Nの違いは、その後の目標達成行動や動機づけといった自己制御過程に何らかの影響を与えらると思われる。

James らを初めとして、心理学の草創期以来、「目

標」を中心に据える理論や概念は膨大な量の研究を生んだ(レビューとして Austin & Vancouver, 1996)。そして、目標表象にP-Nの区別があり、自己制御過程に与える影響が違ふということは、多くの理論や領域で指摘・検討されてきた。それぞれの領域で、P目標表象(ポジティブな目標表象)とN目標表象(ネガティブな目標表象)に当該するものに与えられた名前(ラベル)こそ違うものの¹、この目標表象におけるP-Nの軸を、顕在的にしろ潜在的にしろ仮定している理論や領域は少なくない。

しかし、これらの理論や領域で扱われている「P目標表象」「N目標表象」は、全く同じものなのだろうか。この点に関して、類似しているという指摘がある一方(Carver & Scheier, 2001; Elliot, 1999; Keltner, Gruenfeld, & Anderson, 2003)、やや異なったものであるという主張もあり(Higgins, 1997)、見解は一致していない。このように意見が一致していない理由の1つとして、概念的定義の難しさが挙げられる。ある目標表象がPであるとかNであるとかいうことは、直感的には理解できるが、厳密に定義することは難しい。この定義の難しさが、議論の混乱を招く要因の1つであると言える

* 東京大学大学院教育学研究科 日本学術振興会特別研究員
〒113-0854 文京区本郷7-3-1 murakou@orion.ocn.ne.jp

¹ P-Nではなく、接近(approach)-回避(avoidance)と表現すること多い。

だろう。逆に考えると、この目標表象における P-N の厳密な定義を与えることができるならば、従来の研究における議論の混乱を解消する一助となり、心理学における「目標」研究に、大きな示唆を与えることになるだろう。

本論文の目的は、目標表象の P-N を定義するための統一的な枠組みを提出することである。そして、その上で以下の3点の検討を行い、提出した枠組みの有用性・妥当性を明らかにしていきたい。第1に、具体的な理論・領域を取り上げ、それらの領域における「P目標表象」「N目標表象」を、提唱した枠組みによって捉え直すことである。ここでは特に、目標表象の P-N 軸の類似性がよく指摘される、制御理論・達成目標理論・目標フレーミング効果研究・制御焦点理論を扱う。第2に、提出した枠組みと先行知見をもとに、目標表象における P-N の違いが、自己制御過程に与える影響を明らかにすることである。第3に、目標表象における P-N の違いが、自己制御過程に影響を与える際の、背景メカニズムを考察することである。本論文は、この上記の目的を順に追う形で構成している。

目標表象における3つのP-N軸—3次元の枠組み—

目標表象に P-N の区別を仮定している研究では、目標表象の P-N を1次元的に捉えているものが多かった (Elliot & Covington, 2001; Ford & Nichols, 1991)。このことが、目標表象の P-N の定義を混乱させ、理論間の関係を不明確にしていた原因であると思われる。それに対し本稿では、「3次元の枠組み」というものを提案したい。これは、目標表象の P-N を、「基準の次元」「達成の次元」「結果の次元」という3つの P-N の極を持つ次元(軸)に分けて概念化するものである。この枠組みによって、目標表象の P-N を、統一的に定義することが可能になると思われる。以下では、それぞれの次元について、その定義を述べたい。

目標表象の基準の次元

目標の基準に関する次元とは、目標の基準・最終状態 (end-state) が接近 (到達) すべきものであるか、回避すべきものであるかに関する次元である。この次元における P は接近の目標表象であり、N は回避の目標表象を示す。すなわち、最終状態に接近・到達することが目的となる目標表象は、この基準次元の価が P であると考え。一方、最終状態を回避する (到達しないようにする) が目的となる目標表象は、基準次元の価が N であると考え。例えば、「学校に間に合うようにする」という目標表象は、「間に合う」という基準 (最終

状態)に到達することが目的になる目標表象なので、基準次元の価は P である。逆に、同じ意味の目標でも、「学校に遅刻しないようにする」という目標表象は、「遅刻する」という基準 (最終状態)を避けることが目的になる目標表象なので、基準次元の価は N である。ただし、基準が接近すべきもののなのか、回避すべきものののかは、客観的に決まるものではない。目標を表象する側が目標を主観的にどのように受け取るかによって決まる。例えば、「遅刻する」基準が表象されていたとしても、その基準を達成することが目的となっている場合があるならば、その時の基準次元の価は P である。

目標表象の達成の次元

同じ「学校に間に合うようにする」という目標を持っていても、それをうまく実行した姿をイメージする場合もあれば、そうでない場合もあると思われる。目標の達成に関する次元とは、その目標が達成された場合を予期したり考えたりするか否かに関する次元である。この次元における P は成功の目標表象を、N は失敗の目標表象を示す。ここで「目標の成功」とは、基準次元の価が P の最終状態に到達するか、基準次元の価が N の最終状態を回避することである。例えば、「学校に遅刻しないだろう」は、『「学校に遅刻する」ことは『ない』だろう』という構造であり、基準次元の価は N だが、その基準を回避することを予期しているので、達成次元の価は P の目標表象である。逆に「学校には間に合わないだろう」は、『「学校に間に合う」ことは『ない』だろう』という構造であり、基準次元の価は P だが、その基準に到達できないことを予期している。従って、達成次元の価が N の目標表象ということになる。なお、この場合の「予期」とは本人の意図に伴う主観的成功確率・本人の意図を離れた一種の確率期待の両方を含む。

目標表象の結果の次元

同じように「学校に間に合う」という目標の達成を予期したとしても、その結果として、「先生に誉められる」ことをイメージする場合も、「先生に叱られることを回避する」ことを考える場合もある。目標の結果に関する次元とは、目標達成行動の結果 (outcome) として、ポジティブな結果 (報酬など) に焦点を当てているか、それともネガティブな結果 (罰など) に焦点を当てているかに関する次元である。この次元における P は報酬を得ることを、N は罰を回避することを意味する。すなわち、報酬に焦点を当てた目標表象は、結果次元の価が P であり、罰に焦点を当てた目標表象は、結果次元の価が N である。この場合、結果は、物理的・外

的なものに限らず、例えば自尊心の充足といった、内的なものも含む。ただし、何を報酬・罰と考えるかは、基準次元と同じく、目標の受け手が目標を主観的にどのように捉えるかによって異なる。例えば、同じ「誉められる」という結果でも、成功恐怖の人にとっては、その表象の結果次元の価がNであることもあり得るだろう。

基準の次元が「何をするのか」ということに関する次元とするなら、結果の次元は「何のためにするのか」ということに関する次元だともいえる。また、「何のためにするのか」という次元は、現在関与している目標の、よりメタレベル・上位の目標 (Austin & Vancouver, 1996; Powers, 1978; Vallacher & Wegner, 1987) だと考えることもできよう。そのように考えると、結果次元の価というものは、より上位の目標における基準次元の価だと捉えることも可能である。

以上述べてきた3つのP-N軸の組み合わせに関し、ある目標表象に対する具体例を書いたのがTABLE 1である。同じ内容の目標も、目標の与え方や状況要因、受け手の知識構造などによって、この3つのP-N軸に異なった形で表象される。各軸におけるP-Nは、それぞれ強度を持っており、同じPであっても、その程度が違うことも考えられる。また、この3軸におけるP-Nの価は、目標の内容とは独立に定義される。これまでの研究では、「社会的目標」や「課題志向的目標」といった質的に異なる内容の目標が複数種類同定されているが (Ford & Nichols, 1991)、これらすべての目標に、3次元の枠組みを適用することが可能である。

では、この枠組みで、目標表象のP-Nを扱った従来の理論や領域は、どのように捉え直すことができるのであろうか。以下では、目標表象にP-Nの区別を仮定している研究の中でも、しばしばその類似性が指摘される制御理論・達成目標理論・目標フレーミング効果研究・制御焦点理論を具体的に取り上げる。そして、これらの理論における目標表象のPとNを、提唱した枠組みによって捉え直し、各理論・領域における目標表象のP-Nがどのような意味で同じであり、どのよ

うな意味で違うのかを明らかにしたい。

3次元の枠組みによる従来の理論の捉え直し

制御理論

目標表象に、PとNの違いがあるということを、明示的に示した理論として代表的なのが制御理論 (control theory; Carver & Scheier, 1982, 1998, 2001) である。制御理論は、サイバネティクス (Wiener, 1953) の考え方を心理学に応用した理論であり、人間の行動制御を、フィードバック・ループの過程であると考ええる。具体的には、人はその状況で顕現的な基準と現在の自分の状態を、フィードバックを用いながら比較し、その不一致が少なくなるように行動制御を行うとする。そして、その考えに基づいて、例えば動機づけといった、様々な事象を、包括的に理解することを目指す。

サイバネティクスの考え方を、心理学に援用しようとした理論は、制御理論だけではないが (Miller, Galanter, & Pribram, 1960; Powers, 1978)、この理論の特徴の1つとして、フィードバック・ループの性質の違いによって、2種類の自己制御を区別したことが挙げられる。1つは、接近ループ (ネガティブ・フィードバック・ループ) であり、顕現的な基準とのズレ (discrepancy) をできるだけ小さくしようとする形の自己制御である。そして、もう1つは回避ループ (ポジティブ・フィードバック・ループ) であり、基準とのズレをできるだけ大きくしようとする形の自己制御である。Carver & Scheier (1998) は、行動や筋肉運動レベルにもこの2種類のフィードバック・ループの違いを考えているが、主として認知的な目標における質の違いとして、この違いを捉えている。

ここで接近ループは、ある基準へ到達 (接近) することが目的となっているのだから、基準次元の価がPの目標表象だと考えることが可能である。一方、回避ループは、その基準を避けることが目的となるので、基準次元の価がNの目標表象だと考えることができる。すなわち、制御理論におけるフィードバック・ループの違いは、目標表象の基準次元におけるP-Nの違いで

TABLE 1 目標表象における3つのP-N軸 (3次元の枠組み)

		結果次元の価	
		P	N
基準次元の価	P	達成次元の価P	間に合って誉められる
		達成次元の価N	間に合わなくて誉められない
	N	達成次元の価P	遅刻しなくて怒られる
		達成次元の価N	遅刻して怒られる

あるということができる。

達成目標理論

近年特に、目標表象における P-N の違いを重要視し、精力的に研究を行っている理論として、達成目標理論 (achievement goal theory ; Dweck & Leggett, 1988 ; Elliot, 1999 ; Nicholls, 1984) を挙げることができる。達成目標理論は、達成状況における目標 (達成目標) に着目し、その目標が行動制御過程に与える影響を定式化した理論である。従来の達成目標理論では、達成目標として、習得目標 (mastery goal) と遂行目標 (performance goal) という2種類が想定されていた。しかし、近年 Elliot らによって再概念化が進み (Elliot & Church, 1997 ; Elliot & Harackiewicz, 1996)、達成目標をその有能感 (competence) の定義と価 (valence) という2次元によって、4種類に分類することが提唱された (FIGURE 1 ; Elliot, 1999 ; Elliot & McGregor, 2001 ; Pintrich, 2000 ; より詳細な議論として Elliot & Thrash, 2001 ; 村山, 2003)。

有能感の定義とは、目標の評価基準に関する次元であり、個人内もしくは絶対的な評価基準を持つ目標 (習得目標) と、他者との相対的な評価基準を持つ目標 (遂行目標) が区別される。一方、有能感の価の次元では、P と N の2種類が区別され、その評価基準に到達することが目標になる場合 (接近目標) を P、その評価基準に到達しないことを避ける場合 (回避目標) を N と考える。例えば、遂行回避目標は、有能感の定義が相対的であり、価が N であるため、「他の人よりもできないことを避ける」目標である。

ここで有能感の価に着目してみる。有能感の価が P の場合、その評価基準に到達することが目標になるということは、基準次元の価が P であると考えることができる。逆に、有能感の価が N の場合は、基準次元の価が N であるといえるだろう。このように考えると、達成目標理論における「有能感の価 (接近目標と回避目標の違い)」の次元は、まさに基準の次元にほかならない。従って、達成目標理論は、扱っている状況こそ達成場面に限定されるが、「基準の次元」に関する理論として、捉えることが可能である。そして、達成目標理論

における接近目標と回避目標の違いは、制御理論における2つのフィードバック・ループの違いと、その定義の上ではほぼ同一だと考えることができるのである。

目標フレーミング効果研究

フレーミング効果 (framing effect ; Tversky & Kahneman, 1979, 1981) とは、あるメッセージの客観的状況が同じでも、その心的構成の仕方 (フレーミング) が P か N かによって、その後の選択行動や意思決定が変わってくる効果のことである (竹村, 1994)。Tversky & Kahneman (1981) が「アジアの病気問題」でその存在を指摘して以来、フレーミング効果は意思決定や説得の分野などで、多くの研究を生んだ (Fagley & Miller, 1987 ; McNeil, Pauker, Sox, & Tversky, 1987 ; Meyerowitz & Chaiken, 1987 ; メタ分析として Kuhberger, 1998)。フレーミング効果で操作されるメッセージは、いくつかの種類に分類可能であることが指摘されている (Levin, Schneider, & Gaeth, 1998)。その中でも、「目標フレーミング」と呼ばれるものは、まだそれに特化した研究が少なく、特定の理論が提出されているわけではないが、目標表象に対するフレーミング効果を検討していると考えることができる。従って、以下ではこのタイプのフレーミング効果研究のみを扱い、3次元の枠組みからどのように捉えられるかを検討したい。

目標フレーミング効果研究では、例えば「もし朝食を食べれば、元気になります」というような、ある目標達成行動 (この場合、「朝食を食べる」) を促進するためのメッセージに対し、P もしくは N のフレーミングを行い、効果の違いを見る。目標フレーミングに関する研究は、いくつかなされているが、問題点として、P フレーミング・N フレーミングの定義が多義的であることが指摘されており、研究間の合意が得られていない (Levin et al., 1998)。ここで達成次元・結果次元という2軸が、この P フレーミング・N フレーミングの定義を正確に同定するために、有用だと思われる。

FIGURE 2 には、上記の例を用いて、達成次元・結果次元という2次元の枠組みから見た、メッセージフレーミングのパターンが示されている。図から明らか

		有能感の定義	
		個人内／絶対	相対
有能感の価	P	習得接近目標	遂行接近目標
	N	習得回避目標	遂行回避目標

注) Elliot & McGregor (2001) を改変

FIGURE 1 達成目標理論における達成目標の4分類

		結果次元の価	
		P (元気)	N (病気)
達成次元の価	P (食べる)	A : 朝食を食べれば、元気になります	C : 朝食を食べれば、病気になりません
	N (食べない)	B : 朝食を食べなければ、元気になりません	D : 朝食を食べなければ、病気になってしまいます

FIGURE 2 達成次元の価・結果次元の価による、フレーミングの分類

のように、ある目標メッセージは、達成次元の価と結果次元の価という2つの観点から、4つの種類にフレーミングすることが可能である。具体的には、「朝食を食べる」というのが目標の基準にあたり、それを達成した場合・達成しなかった場合の予期がそれぞれ達成次元の価のPとNに当該すると考えられる。また、朝食を食べた結果、「元気になる」もしくは「病気になる」ことの違いは、目標達成行動の結果なので、それぞれ結果次元の価のPとNに対応すると考えられる。

この枠組みを用いれば、従来の研究における、フレーミングの定義の違いを、整理して把握することができる。例えば、Robberson & Rogers (1988) では、達成次元の価P・結果次元の価PをPフレーミング、達成次元の価N・結果次元の価PをNフレーミングと考えているのに対し、Levin, Gaeth, Schreiber, & Lauriola (2002) では、Pフレーミングを達成次元の価P・結果次元の価Nに、Nフレーミングを達成次元の価N・結果次元の価Nに対応させていると捉えることができる。また、Meyerowitz & Chaiken (1987) や Tykocinski, Higgins, & Chaiken (1994) では、結果次元の価にはPとNを両方呈示した上で、達成次元の価を変化させることによって、フレーミングを操作している。さらに、これまで目標フレーミングの多義性に関しては、幾人かの研究者による概念的整理がなされてきたが (Levin et al., 1998 ; Rothman & Salovey, 1997 ; Wilson, Purdon, & Wallston, 1988), それらもすべて、この枠組みで包括的に理解可能である。

このように、従来の目標フレーミング効果研究におけるP目標とN目標は、達成の次元と結果の次元という2次元によって定義直すことができる。今後重要なのは、1次元的にフレーミングのP-Nを捉えるのではなく、このような2次元の枠組みを念頭に置いた上で、それぞれの効果を分離して検討することだろう。

制御焦点理論

制御焦点理論 (regulatory focus theory ; Higgins, 1997) では、目標における焦点状態 (focus) の違いが、行動制御に異なる影響を与えると考える。焦点状態として想定されているものは、促進焦点 (promotion focus) と抑制焦点 (prevention focus) という2種類である。促進焦点と抑制焦点は、それぞれ理想自己と義務自己 (Higgins, 1987) の活性化などによって規定される (Higgins, Roney, Crowe, & Hymes, 1994)。また、フレーミングによる獲得状況もしくは損失状況の顕現化によっても、促進焦点・抑制焦点は高められる (Crowe & Higgins, 1997 ;

Shah & Higgins, 1997)。

ここで促進焦点とは、ポジティブな結果の有無に焦点を当てている状態であり、一方抑制焦点とは、ネガティブな結果の有無に焦点を当てている状態である (Higgins, 1997)。よって、促進焦点とは結果次元の価がPの状態に、抑制焦点とは結果次元の価がNの状態に対応するといえる。すなわち、制御焦点理論における焦点状態の違いは、目標表象における結果次元の価の違いだと捉えることが可能である。

ただし、制御焦点理論は、焦点状態というものが、上述したように目標表象の状態に近いものであるのか、方略といった行動制御過程を示しているのか、それとも理想自己・義務自己の活性化そのものを指しているのか、判然としない記述が多く (Higgins, 1997), その実体が不明確だという問題点がある。従って、制御焦点と結果次元との関係をより明確にするためにも、制御焦点の実体を厳密に考えていく必要があるだろう。

以上、制御理論・達成目標理論・目標フレーミング効果研究・制御焦点理論という4つの理論・領域を取り上げ、これらの理論における目標表象のPとNを、3次元の枠組みによって捉え直した。その結果、制御理論における2つのフィードバック・ループの違いと、達成目標理論の接近目標と回避目標との違いは、目標表象における基準次元の違いに対応することが明らかになった。また目標フレーミング研究のPフレーミングとNフレーミングは、達成次元の価と結果次元の価によって定式化が可能であり、制御焦点理論における促進焦点と抑制焦点は、それぞれ結果次元の価がPとNの場合に対応することが示された。すなわち、今回扱った4つの理論のP目標表象とN目標表象を、TABLE 1のいずれかの次元に位置づけることができたといえよう。この4つの理論の類似点・相違点はしばしば指摘されるが (Carver & Scheier, 1998, 2001 ; Elliot & Harackiewicz, 1996 ; Higgins, 1997 ; Higgins et al., 1994), 今回の枠組みを用いることによって、それがかなり明確化したといえよう。

では、今回提唱した3つの次元はそれぞれ、行動制御過程にどのような影響を与えているのであろうか。これは、今まで捉え直してきた理論から逆に示唆を得ることが可能である。次節では、この問題について、検討を加えたい。

3つのP-N軸が行動制御過程に与える影響

基準次元の価が行動制御過程に与える影響

制御理論では、回避ループよりも接近ループの方が、適応的な自己制御になりやすいことが論じられている。すなわち、回避ループは、接近ループに比べ、健全な自己制御に繋がらないとされている (Carver & Scheier, 1998)。ここから、基準次元の価がNの場合よりもPの場合に、適応的な自己制御が起こることが示唆される。だが、制御理論は、一種のメタ理論ともいえるものであり、直接的な実証研究がほとんど行われていない (Locke, 1991)。従って、制御理論が示す、基準次元の価と自己制御過程との関係も、妥当なものであるかは疑わしい。

一方、達成目標理論では、制御理論と違い、目標が行動制御に与える影響を、実証的に検討している。そして、回避目標が、接近目標よりも、動機づけを減少させたり遂行成績を低下させたりすることが、実験的検討や調査研究によって示されている (Elliot & Church, 1997 ; Elliot & Harackiewicz, 1996 ; Rawsthorne & Elliot, 1999)。従って、基準次元の価がPの場合に比べて、Nの場合に非適応的な自己制御が生じることができよう。このことは、回避ループが非適応的だとする制御理論の考え方とも整合する。しかし、達成目標理論の実証研究では、上述の概念的定義を厳密に反映しておらず、ほとんどにおいて基準次元以外の次元が交絡している (同様の指摘として Elliot & Thrash, 2001 ; Midgley, Kaplan, Middleton, Urdu, Maehr, Hicks, Anderman, & Roeser, 1998)。例えば、Elliot & Church (1997) の達成目標を測定する質問紙 (日本語版として田中・山内, 2000) では、遂行接近目標 (基準次元の価P) を測定する項目として、「家族や友達やほかの人たちによくできると思われるように、よい成績をとりたいと思います」というものがある。この項目は、「よい成績をとる」という基準次元の価がPの目標表象であると同時に、「よくできると思われる」という、目標達成行動の結果 (理由) にまで言及がなされている。すなわち、結果次元の価がPの項目と考えることも可能であり、基準次元と結果次元の交絡が指摘できる。従って、得られた結果が基準次元の価の効果なのか、結果次元の価の効果なのかが分からない²。

² Elliot & Thrash (2001) は、純粋な意味での達成目標と、他の構成概念が混在している達成目標とを区別したが、この議論もすべて基準次元の価と結果次元の価という枠組みで捉えることが可能である。

このように、制御理論からも達成目標理論からも、基準次元の価がPのときに、Nの場合に比べて適応的な行動制御過程を生み出すことは示唆されるものの、明確な結論を下すことはできない。今後は、3次元の枠組みを意識しながら、基準次元の価の持つ影響を純粹に切り出す研究を進めていく必要があるだろう。
達成次元の価・結果次元の価が行動制御過程に与える影響

目標フレーミング効果研究では、NフレーミングがPフレーミングに比べ、被験者の目標遂行行動を促進することが多いことが指摘されている (Levin et al., 1998)。だが、先述のように、達成次元の価と結果次元の価が分けて検討されていないため、この効果がどの次元の効果によるものかは明らかではない。他のフレーミング効果に比べて、結果の一貫性が低いのも (Levin et al., 2002)、この次元の交絡が大きな要因になっていると思われる。従って、目標フレーミング効果研究から、達成次元の価と結果次元の価が、行動制御過程に与える影響に関して、示唆を得るのは難しい。Nフレーミングが行動を促進するのはどちらの次元であるのか、2つの次元を意識しつつ、両者を直交させた実験などが望まれる。

一方、制御焦点理論での実証研究からは、結果次元の価が行動制御過程に与える影響に関して、多くの示唆を得ることができる。具体的には、結果次元の価がP (促進焦点) のときには、Nのとき (抑制焦点) に比べて、目標達成への積極的な方略を使用すること (Higgins et al., 1994 ; Shah, Higgins, & Friedman, 1998) や、課題への粘り強さを促進すること (Crowe & Higgins, 1997 ; Roney, Higgins, & Shah, 1995) が示されている。

しかし、制御焦点理論は、他の次元との違いをある程度意識している (Higgins & Tykocinski, 1992) のにもかかわらず、実証研究において、結果次元の価と他の次元の価との交絡がいくつか見られる。例えば、Crowe & Higgins (1997) では、促進焦点条件に対して「もし練習課題でいい成績をとったら、被験者が好きな課題をできる」と教示し、抑制焦点条件に対しては「もし練習課題で悪い成績を取らなかったら被験者が嫌いな課題をしなくてすむ」と教示している。この教示は、結果次元の価 (好きな課題と嫌いな課題で、どちらが顕現的であるか) の操作ではあるものの、基準次元の価 (いい成績を取ることと悪い成績を避けることで、どちらが目標か) の操作が交絡している。同様の交絡は、他の研究 (Roney et al., 1995 など) にも指摘でき、結果次元の価が行動制御過程に与える影響を、不明確にしている。

この節では、提唱した3つのP-N軸が、行動制御過程にそれぞれ与える影響を明らかにすることを目的とした。しかし、実証的研究では現在のところ、3次元の枠組みを意識していないため、次元間の交絡が多く、明確な結論を得ることはできなかった。3次元の枠組みが、「理論間の関係の把握」だけでなく、「心理的な影響・機能の差異」という観点からも妥当であるかは、新たな検討を待つ必要があるだろう。今後、3次元の交絡を排除した、厳密な実証研究が望まれる。

このように、3つのP-N軸が、行動制御過程に与える影響は明らかではない。しかし、その影響メカニズムに関しては、他領域の研究などを参照することによって、ある程度示すことができると思われる。次節では、3つのP-N軸が行動制御過程に影響を与える際の背景メカニズムを考察・検討したい。

3つのP-N軸の行動制御過程への影響メカニズム

BAS・BISによる媒介—基準次元の価の影響メカニズム—

基準次元の価が行動制御過程に影響を与える際の、背景メカニズムとして、BASとBIS (behavioral activation system/behavioral inhibition system ; Fowles, 1987, 1994 ; Gray, 1987, 1990)を考えることが可能である。BASとBISは、行動主義的な動物実験と神経心理学的な知見によってその存在が提唱されている2種類の動機づけシステムであり、GrayやCloningerといった研究者のパーソナリティ理論の中核を担っている (Cloninger, 1987 ; Gray, 1987 ; Gray, Liebowitz, & Gelder, 1987)。

このシステムの役割は、オペラント条件づけの枠組みで説明される。BASは、何らかの弁別刺激が「ある行動をとれば報酬を与えられる」もしくは「ある行動をとれば罰を除去される」信号となっていたときに起動する動機づけシステムである。この信号は、脳の

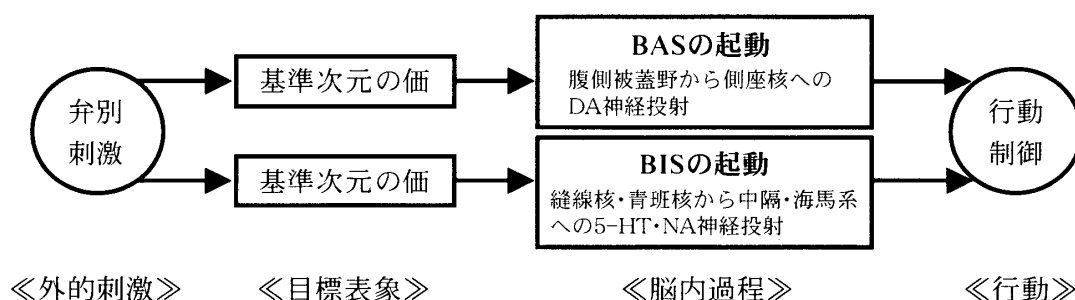
腹側被蓋野から側座核などの辺縁系に投射するドーパミン神経を活性化させ、行動を促進すると考えられており、この一連の脳内過程システムのことをBASと呼ぶ。一方、BISは、何らかの弁別刺激が「ある行動をとれば報酬を除去される」信号となっている場合に起動する動機づけシステムである。この信号は、脳における、縫線核からのセロトニン神経と、青班核からのノルアドレナリン神経の、中隔・海馬系への投射などに関係しており、行動の抑制を生み出すとされている。この一連の脳内過程システムを、BASと対比させ、BISと呼ぶ (Gray, 1987, 1990 ; Gray et al., 1987)。オペラント条件づけにおける強化・罰の概念は、FIGURE 3に示すように4種類に分類することが可能だが、BASはそのうちの正の強化・負の強化に、BISは正の罰・負の罰に関係する動機づけシステムだといえるだろう。

このように考えると、BASが活性化するのは、その理論的定義より、「ある行動をとるべきである」という、基準次元の価がPの目標表象を、弁別刺激の信号によって形成した場合だと解釈することが可能である。一方、BISが活性化するのは、「ある行動をとるべきではない」という、基準次元の価がNの目標表象を、弁別刺激の信号によって形成した場合だと考えられる。すなわち、ある弁別刺激が、目標表象における基準次元の価に影響を与えたときに、BAS・BISが活性化すると考えることができる。ここに、FIGURE 4に示す、目標表象の基準次元の価が、BASとBISを媒介して

		行 動	
		増加	減少
強化子 (刺激)	快刺激	正の強化	負の罰
	不快刺激	負の強化	正の罰

注) Mazur (1994) の表を改変

FIGURE 3 オペラント条件づけにおける強化・罰の概念



注) DA：ドーパミン 5-HT：セロトニン NA：ノルアドレナリン

FIGURE 4 基準次元の価のBAS・BISによる媒介

行動制御過程に影響を与えるというメカニズムを考えることができる。

ただし、BAS・BISのアプローチは、行動主義的な考え方を基盤にしている。従って、ある弁別刺激が、目標表象といった、認知的な要素を媒介してBASとBISに影響を与えるというような考え方に対しては、否定的な研究者も多い (Corr, 2001; Matthews & Gilliland, 1999, 2001)。しかし、人間の場合、BAS・BISの基盤にあるのが、何らかの認知的な要素であると考えことは自然である。また、行動主義の刺激-反応連合と、目標といった認知的な概念を、処理の自動性という観点から結びつけた自動動機理論 (automotive theory; Bargh & Gollwitzer, 1994; Bargh & Ferguson, 2000) の立場から考えると、この両者を結びつけることは、矛盾するものではない。従って、目標表象の基準次元の価というものが、BAS・BISを媒介して行動制御に影響を与えるというメカニズムを想定することは、ある程度の妥当性を有していると思われる。

BAS・BISの問題点と3次元の枠組み このようにBAS・BISは、その理論的定義において、基準次元の価が活性化させる脳内システムだと考えることができる。ところで、今回提唱した「3次元の枠組み」を用いて、BAS・BISを活性化させる目標表象を厳密に定義してみると、BAS・BISアプローチに向けられた批判のうち、いくつかに対して解釈を行い、今後の方向性を提案することが可能になる。以下では、この点に関して、少し言及しておきたい。

BAS・BISアプローチに向けられた批判の1つとして、BAS・BISと感情との関係を挙げることができる。一般に、BASは喜び・安心といったポジティブな感情と、BISは憂鬱・不安といったネガティブな感情と関係があると考えられている (Fowles, 1987)。しかし一方で、Carver & Scheier (2001) は、BASがポジティブな感情だけに、BISがネガティブな感情だけに結びついているとは考えにくいという批判を行った。このような批判が出てくる原因として、BAS・BIS理論では、BAS・BISと感情を対応づける際に、基準次元の価と達成次元の価を交絡させてしまっていることが考えられる。すなわち、BAS・BIS理論では、BASが活性化する (基準次元の価P) ときには、その目標が達成さ

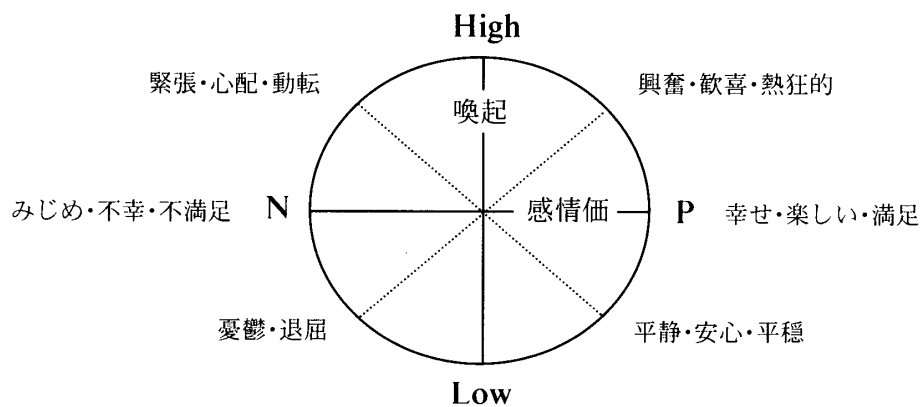
れる場合 (達成次元の価P) のみを、BISが活性化する (基準次元の価N) ときには、その目標が達成されない場合 (達成次元の価N) のみを想定して、感情との関係を論じているため、BASとポジティブな感情を、BISとネガティブな感情を対応づけているのである³。BASとBISが基準次元の価だけによって活性化するのなら、このような感情との対応は、Carver & Scheier (2001) が指摘するように、考えにくい。今後、BAS・BISアプローチは、達成次元の価との関係を意識しながら、感情との対応づけを考えていく必要があると思われる。

また、別の批判として、質問紙研究で、Grayの提唱した理論と一致した結果が得られていないこと (Torrubia, Avila, Molto, & Caseras, 2001; 安田・佐藤, 2002) がしばしば指摘される。先述したように、BAS・BISは、それぞれ「強化」と「罰」に対応する脳内システムだと考えられていた (Figure 3)。これらは、ラットにおける薬物投与や、単一ユニット計測 (single unit recording) による知見 (Depue & Collins, 1999 など) から導き出されたものである。だが、人間を対象とした質問紙研究では、「正の強化」「負の罰」に関する項目が1つのまとまりを構成し、「負の強化」「正の罰」に関する項目が別のまとまりを構成することが示されている (Wilson, Barrett, & Gray, 1989)。このため、BAS・BISを測定する質問紙では、「負の強化」に対応する項目を除外することが多い (Carver & White, 1994; Torrubia et al., 2001; 安田・佐藤, 2002)。このまとまりは、FIGURE 3を見れば明らかなように、行動後の刺激が快であるか不快であるかに関する次元である。そして、目標表象の枠組みで考えるならば、結果次元に対応すると考えられる。すなわち、BAS・BISの質問紙研究の結果は、人間の脳内のメカニズムがたとえGrayの理論どおりであっても、人間は認知レベルにおいて、基準次元の価よりも結果次元の価に敏感であることを示している。今後、BAS・BISの質問紙アプローチは、元来の基準次元の価による概念化に捉われることなく、結果次元の価による概念化も視野に入れて、理論の構築を行う必要性があるだろう。

感情の媒介モデル—達成次元の価・結果次元の価の影響メカニズム—

達成次元の価・結果次元の価の影響メカニズムに関しては、「感情の媒介モデル」というものを考えることができる。このモデルでは、達成次元の価と結果次元の価の違いが、異なった種類の感情を生起させ、その感情によって行動制御過程が変容すると考える。ただし、達成次元の価と結果次元の価は別の次元であるた

³ このことは、BAS・BISが行動主義的な背景を持っていることに起因すると思われる。すなわち、その基準が接近すべきものであれ回避すべきものであれ、「ある行動をする(ある基準に近づく)」ことが前提に置かれているため、達成次元の価との交絡が生じるのだと考えられる。



注) Russell & Carroll (1999a) を改変

FIGURE 5 感情の2次元構造モデル

め、このモデルにおいては、感情のP-Nに関しても、1次元ではない、複数次元からなる構造を想定しなければならないだろう。この点に関して、示唆を与えてくれるのが、RussellらとWatsonらによる、感情の構造に関する論争である (Green, Goldman, & Salovey, 1993; Russell & Carroll, 1999a, 1999b; Watson & Tellegen, 1999)。

この論争は、そもそも感情のP-N軸というものが、双極なのか独立なのかという議論に端を発したものであり、それが後に感情の構造に関する議論へと発展していった (Russell & Barrett, 1999; Watson, Wiese, Vaidya, & Tellegen, 1999)。この議論は、未だいくつかの論点を残しているものの、感情の構造が、感情価と喚起 (arousal) という、直交した2軸によって表現できることに関しては、合意がなされている (FIGURE 5; Russell & Carroll, 1999a)。しかしながら、感情価と喚起が、感情の基本的な次元だと考えることに関しては、いくつかの疑問が提出されている (Watson, Wiese, Vaidya, & Tellegen, 1999)。実際 FIGURE 5 を見ると、感情価と喚起以外にも、直交する軸を考えることが可能である。すなわち、対角線にあたる2軸である。これらはそれぞ

れ、喜び (歓喜) - 憂鬱軸と、安心 - 不安軸と名づけることができるだろう。この2軸は、喚起と感情価という2軸よりも、日常的な感情に関する現象に対して説明力が強く、より主要な次元だという指摘がある (Watson et al., 1999; 反論として Russell & Barrett, 1999)。ここで、感情の基本的な構造が、喜び - 憂鬱の次元と、安心 - 不安という次元から成立していると考えた時、達成次元の価・結果次元の価の影響メカニズムとして、FIGURE 6 のようなモデルを考えることができる。

このモデルでは、結果次元の価が、どちらの次元の感情が生起するかに関与していると考えられる。具体的には、結果次元の価がPのときには、喜び - 憂鬱次元の感情が、結果次元の価がNのときには、安心 - 不安次元の感情が生起するとする。次に、達成次元の価は、選択された感情次元の中での感情価に影響を与えるとする。例えば、結果次元の価がPで達成次元の価がPの場合には、喜び感情が生じ、結果次元の価がNで達成次元の価がNの場合には不安感情が生じると考える。そして、生起した感情によって、行動制御過程が異なる影響を受けるのである。

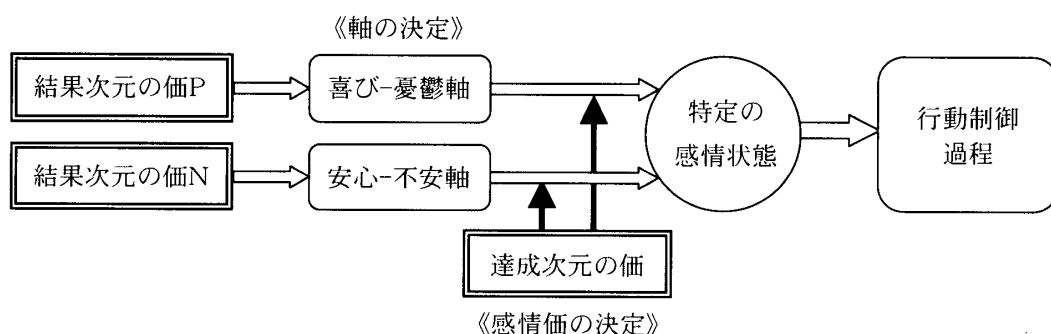


FIGURE 6 達成次元の価・結果次元の価の感情媒介モデル

結果次元の価というものが生起する感情の軸を規定することは、制御焦点理論の源流である、セルフ・ディスクレパンシー理論 (Higgins, 1987) で示唆されている (Higgins, Bond, Klein, & Strauman, 1986 ; Strauman & Higgins, 1987)。さらに、制御焦点理論の枠組みで直接的な検証もなされている (Higgins, Shah, & Friedman, 1997 ; Roney et al. 1995)⁴。また、達成次元の価が感情価に影響を与えるということは、直観的にも自然であり、多くの理論でも指摘がある (Oatley & Johnson-Laird, 1987 など)。そして、憂鬱や不安といった、このモデルにおいて異なる軸と考えられる感情が、質の違う認知過程に結びついていることも、いくつもの研究で明らかになっている (Williams, Watts, MacLeod, & Mathews, 1988)。従って、達成次元・結果次元による感情媒介モデルは、ある程度の妥当性を有していると考えられる。

感情媒介モデルから成立する予測

達成次元の価・結果次元の価に関する感情媒介モデルは、まだ仮説的なモデルであり、今後実証的検討を行う必要がある。一方で、このモデルがある程度妥当だと考えると、達成次元の価・結果次元の価が行動制御過程に与える影響に関し、これまで考えられてこなかった新たな予測を立てることが可能になる。ここでは、そのうちの1つとして、Nフレーミングと目標達成行動との関係について言及したい。

先述したように、Nフレーミングは、目標達成行動を促進する場合があるが、それがどのような場合に生じるかに関しては明らかになっていない。ところで、感情媒介モデルを用いて、Nフレーミングによって喚起される感情を考えた時、不安と憂鬱という2種類のネガティブ感情を考えることができる。そして、不安感情と抑うつ感情を比較した場合、不安感情は時として人を動機づける機能があることが指摘されている (Norem & Cantor, 1986 ; Norem & Illingworth, 1993)。一方で憂鬱感情は、無力感を起こし、行動を不活性化させ

ることが示されている (Abramson, Seligman, & Teasdale, 1978)。従って、感情媒介モデルの観点に立つならば、Nフレーミングが目標達成行動を促進させるのは、不安感情を喚起させた場合、すなわち達成次元の価と結果次元の価がともにNのときだという予測ができるだろう。不安感情を媒介して始発された動機は、非適応的な側面をもっている点には留意しなくてはならないが (Deci & Ryan, 1985)、このような予測を検討することは、理論上も実践上も価値のあることであろう。

この節では、3つのP-N軸が行動制御過程に与える影響メカニズムを検討した。そして、基準次元の影響メカニズムとして、「BAS・BISによる媒介」を、達成次元・結果次元の影響メカニズムとして「感情の媒介モデル」を提案した。一方は神経心理学レベルのメカニズムであり、もう一方は認知・感情レベルのメカニズムであるため、当てられている焦点に違いがある点は留意する必要がある。しかし、どちらのメカニズムも、目標表象の研究に与える示唆は大きい。今後、この仮説的メカニズムを実証していく必要があるだろう。

まとめと今後の課題

本論文では、目標表象を、基準次元・達成次元・結果次元という3つの次元で捉える枠組みを提出した。そして、その枠組みに基づいて制御理論・達成目標理論・目標フレーミング効果研究・制御焦点理論におけるP目標表象とN目標表象を、お互いを関係づけながら統合的に把握する試みを行った。今回は言及しなかったが、目標表象のP-N軸という枠組みで捉えられると思われる理論や領域は、他にも存在する (Atkinson, 1957 ; Cacioppo & Berntson, 1994 ; Ford & Nichols, 1991 など)。これらの理論が、すべて3次元の目標表象という共通の基盤を持つのだと認識した上で研究を続けていくことは、新たな現象の予測・発見にも繋がり、意義のあることだと思われる。

さらに本論文では、それら3つのP-N軸が、行動制御過程に与える影響とそのメカニズムに関して考察した。しかし、どの次元に関しても、実証的な研究では他の次元との交絡が多く、明確に結論を下すことは難しい。今後は、これら目標表象の3次元の定義を意識した上で、それらの効果を分離して検討した研究が望まれる。そして、今回提唱されたメカニズムに関する仮説が妥当であるかどうかを、直接的に検証していく必要があると思われる。

⁴ Watson, Wiese, Vaidya, & Tellegen (1999) は、喜び-憂鬱次元の背後にBASを、安心-不安次元の背後にBISを想定しているが、これは先述したBAS・BISの理論自体に合致せず (cf., Fowles, 1987)、安易な議論だと言わざるを得ない。また、Carver & Scheier (2001) は、この感情軸の背後に基準次元の価を想定しており、接近ループは喜び-憂鬱次元に、回避ループは安心-不安次元に関係するという議論を行っている。しかしながら、それを直接検証した実証研究は見られない。また、「いい成績を取ろうとする」といった接近ループであっても、「親に叱られる」というネガティブな結果 (理由) に焦点を当てているならば、安心-不安感情が喚起されることは容易に想像がつく。従って、喜び-憂鬱軸・安心-不安軸の背後には、結果次元の価を仮定することの方が妥当であろう。

最後に、今後の課題として、実際の目標表象に介入を行い、人の行動制御過程を変容させる方法を考案することの重要性を喚起したい。達成目標理論やフレーミング効果、制御焦点理論に関する研究は、同じ意味内容の目標であっても、目標を与える側の、ちょっとした言葉使いの違いで、受け手の目標表象が変化することを示唆している。この知見をより発展させ、わずかな言葉使い・言葉がけのレベルで、目標表象を変容させる方法が確立されたなら、それは実用上大きな意味を持ってくるに違いない。特に教育現場では、学習者の動機づけの低下が問題となっている現在、外的資源を必要とせずに学習者を適応的な学習に向かわせる、言葉がけの技法を考案することは、非常に意義のあることだろう。ただし、フレーミング効果は、状況要因や受け手の特性によって結果が大きく左右されることが指摘されている (Krishnamurthy, Carter, & Blair, 2001; Rothman & Salovey, 1997; Rothman, Salovey, Antone, Keough, & Martin, 1993)。従って、そのような限界を踏まえながら、言葉がけのレベルにとどまらず、受け手の知識構造に直接介入する方法も視野に入れて、研究を続けていく必要があるだろう。

引用文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. 1978 Learned helplessness : Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Atkinson, J. W. 1957 Motivational determinants of risk-taking behavior. *Psychological Review*, **64**, 359-372.
- Austin, J. T., & Vancouver, J. B. 1996 Goal constructs in psychology : Structure, process, and content. *Psychological Bulletin*, **120**, 338-375.
- Bargh, J. A., & Ferguson, J. F. 2000 Beyond behaviorism : On the automaticity of higher mental processes. *Psychological Bulletin*, **126**, 925-945.
- Bargh, J. A., & Gollwitzer, P. M. 1994 Environmental control of goal-directed action : Automatic and strategic contingencies between situations and behavior. In W. D. Spaulding (Ed.), *Integrative views of motivation, cognition, and emotion*. Lincoln, NE : University of Nebraska Press. Pp.71-123.
- Cacioppo, J. T., & Berntson, G. G. 1994 Relationship between attitudes and evaluative space : A critical review, with emphasis on the separability of positive and negative substrates. *Psychological Bulletin*, **115**, 401-423.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1982 Control theory : A useful conceptual framework for personality, social, clinical, and health psychology. *Psychological Bulletin*, **92**, 111-135.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 1998 *On the self-regulation of behavior*. New York : Cambridge University Press.
- Carver, C. S., & Scheier, M. F. 2001 On the structure of behavioral self-regulation. In M. Boekaerts, P. R. Pintrich, & M. Zeidner (Eds.), *Handbook of self-regulation*. San Diego : Academic Press. Pp.41-84.
- Carver, C. S., & White, T. L. 1994 Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment : The BIS BAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.
- Cloninger, C. R. 1987 A systematic method for clinical description and classification of personality variants : A proposal. *Archives of General Psychiatry*, **44**, 573-588.
- Corr, P. J. 2001 Testing problems in J. A. Gray's personality theory : A commentary on Matthews and Gilliland (1999). *Personality and Individual Differences*, **30**, 333-352.
- Crowe, E., & Higgins, E. T. 1997 Regulatory focus and strategic inclinations : Promotion and prevention in decision-making. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **69**, 117-132.
- Depue, R. A., & Collins, P. F. 1999 Neurobiology of the structure of personality : Dopamine, facilitation of incentive motivation, and extraversion. *Behavioral and Brain Sciences*, **22**, 491-569.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. 1985 *Intrinsic motivation and self-determination*. NY : Plenum Press.
- Dweck, C. S., & Leggett, E. L. 1988 A social-cognitive approach to motivation and personality. *Psychological Review*, **95**, 256-273.

- Elliot, A. J. 1999 Approach and avoidance motivation and achievement goals. *Educational Psychologist*, **34**, 169-189.
- Elliot, A. J., & Church, M. A. 1997 A hierarchical model of approach and avoidance achievement motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 218-232.
- Elliot, A. J., & Covington, M. V. 2001 Approach and avoidance motivation. *Educational Psychology Review*, **13**, 73-92.
- Elliot, A. J., & Harackiewicz, J. M. 1996 Approach and avoidance achievement goals and intrinsic motivation : A mediational analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 461-475.
- Elliot, A. J., & McGregor, H. A. 2001 A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, **80**, 501-519.
- Elliot, A. J., & Thrash, T. M. 2001 Achievement goals and the hierarchical model of achievement motivation. *Educational Psychology Review*, **13**, 139-156.
- Fagley, N. S., & Miller, P. M. 1987 The effects of decision framing on choice of risky vs. certain options. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **39**, 264-277.
- Ford, M. E., & Nichols, C. W. 1991 Using goal assessments to identify motivational patterns and facilitate behavioral regulation. In M. Maehr & P. Pintrich (Eds.), *Advances in motivation and achievement*, Vol. 7 : Goals and self-regulatory processes. Greenwich, CT : JAI Press. Pp.57-84.
- Fowles, D. C. 1987 Application of a behavioral theory of motivation to the concepts of anxiety and impulsivity. *Journal of Research in Personality*, **21**, 417-435.
- Fowles, D. C. 1994 A motivational theory of psychopathology. In W. D. Spaulding (Ed.), *Integrative views of motivation, cognition, and emotion*. Lincoln, NE : University of Nebraska Press. Pp.181-238.
- Gray, J. A. 1987 Perspectives on anxiety and impulsivity : A commentary. *Journal of Research in Personality*, **21**, 493-509.
- Gray, J. A. 1990 Brain systems that mediate both emotion and cognition. *Cognition and Emotion*, **4**, 269-288.
- Gray, J. A., Liebowitz, M., R., & Gelder, M. G. 1987 Discussion arising from : Cloninger, C. R. A unified biosocial theory of personality and its role in the development of anxiety-states. *Psychiatric Developments*, **4**, 377-392.
- Green, D. P., Goldman, S. L., & Salovey, P. 1993 Measurement error masks bipolarity in affect ratings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 1029-1041.
- Higgins, E. T. 1987 Self-discrepancy : A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Higgins, E. T. 1997 Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, **52**, 1280-1300.
- Higgins, E. T., Bond, R. N., Klein, R., & Strauman, T. 1986 Self-discrepancies and emotional vulnerability : How magnitude, accessibility, and type of discrepancy influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 5-15.
- Higgins, E. T., Roney, C., Crowe, E., & Hymes, C. 1994 Ideal versus ought predilections for approach and avoidance : Distinct self-regulatory systems. *Journal of Personality and Social Psychology*, **66**, 276-286.
- Higgins, E. T., Shah, J., & Friedman, R. 1997 Emotional responses to goal attainment : Strength of regulatory focus as moderator. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 515-525.
- Higgins, E. T., & Tykocinski, O. 1992 Self-discrepancies and biographical memory : Personality and cognition at the level of psychological situation. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 527-535.
- Keltner, D., Gruenfeld, D. H., & Anderson, C. 2003 Power, approach, and inhibition. *Psychological Review*, **110**, 265-284.
- Krishnamurthy, P., Carter, P., & Blair, E. 2001 Attribute framing and goal framing effects in health decisions. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **85**, 382-399.

- Kühberger, A. 1998 The influence of framing on risky decisions : A meta-analysis. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **75**, 23-55.
- Levin, I. P., Gaeth, G. J., Schreiber, J., & Lauriola, M. 2002 A new look at framing effects : Distribution of effect sizes, individual differences, and independence of types of effects. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **88**, 411-429.
- Levin I. P., Schneider S. L., & Gaeth, G. J. 1998 All frames are not created equal : A typology and critical analysis of framing effects. *Organizational Behavior and Human Decision Processes*, **76**, 149-188.
- Locke, E. A. 1991 Goal theory vs. control theory: Contrasting approaches to understanding work motivation. *Motivation and Emotion*, **15**, 9-28.
- Matthews, G., & Gilliland, K. 1999 The personality theories of H. J. Eysenck and J. A. Gray : A comparative view. *Personality and Individual Differences*, **26**, 583-626.
- Matthews, G., & Gilliland, K. 2001 Personality, biology, and cognitive science : A reply to Corr (2001). *Personality and Individual Differences*, **30**, 353-362.
- Mazur, J. E. 1994 *Learning and behavior*. Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall. 磯 博行・坂上貴之・川合伸幸 (訳) 1999 メイザーの学習と行動 日本語版第2版 二瓶社
- McNeil, B. J., Pauker, S. G., Sox, H. C., & Tversky, A. 1987 On the elicitation of preferences for alternative therapies. *New England Journal of Medicine*, **306**, 1259-1262.
- Meyerowitz, B. E., & Chaiken, S. 1987 The effects of message framing on breast self-examination attitudes, intentions, and behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 500-510.
- Midgley, C., Kaplan, A., Middleton, M., Urdan, T., Maehr, M. L., Hicks, L., Anderman, E., & Roeser, R. W. 1998 Development and validation of scales assessing students' achievement goal orientation. *Contemporary Educational Psychology*, **23**, 113-131.
- Miller, G. A., Galanter, E., & Pribram, K. H. 1960 *Plans and the structure of behavior*. Oxford, England : Holt. 十島雍蔵ほか (訳) 1980 プランと行動の構造 : 心理サイバネティクス序説 誠信書房
- 村山 航 2003 達成目標理論の変遷と展望 : 「緩い統合」という視座からのアプローチ 心理学評論, **46**, 564-583. (Murayama, K. 2003 History and recent advances in achievement goal theory : A critical review of Ames and Archer's (1987, 1988) framework. *Japanese Psychological Review*, **46**, 564-583.)
- Nicholls, J. G. 1984 Achievement motivation: Conceptions of ability, subjective experience, task choice, and performance. *Psychological Review*, **91**, 328-346.
- Norem, J. K., & Cantor, N. 1986 Defensive pessimism : Harnessing anxiety as motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1208-1217.
- Norem, J. K., & Illingworth, K. S. S. 1993 Strategy-dependent effects of reflecting on self and tasks : Some implications of optimism and defensive pessimism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 822-835.
- Oatley, K., & Johnson-Laird, P. N. 1987 Towards a cognitive theory of emotions. *Cognition and Emotion*, **1**, 29-50.
- Pintrich, P. R. 2000 An achievement goal theory perspective on issues in motivation terminology, theory, and research. *Contemporary Educational Psychology*, **25**, 92-104.
- Powers, W. T. 1978 Quantitative analysis of purposive systems : Some spadework at the foundations of scientific psychology. *Psychological Review*, **85**, 417-435.
- Rawsthorne, L. J., & Elliot, A. J. 1999 Achievement goals and intrinsic motivation : A meta-analytic review. *Personality and Social Psychology Review*, **3**, 326-344.
- Robberson, M. R., & Rogers, R. W. 1988 Beyond fear appeals : Negative and positive persuasive appeals to health and self-esteem. *Journal of Applied Social Psychology*, **18**, 277-287.
- Roney, C. J. R., Higgins, E. T., & Shah, J. 1995

- Goals and framing : How outcome focus influences motivation and emotion. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 1151-1160.
- Rothman, A. J., & Salovey, P. 1997 Shaping perceptions to motivate healthy behavior : The role of message framing. *Psychological Bulletin*, **121**, 3-19.
- Rothman, A. J., Salovey, P., Antone, C., Keough, K., & Martin, C. D. 1993 The influence of message framing on intentions to perform health behaviors. *Journal of Experimental Social Psychology*, **29**, 408-433.
- Russell, J. A., & Barrett, L. F. 1999 Core affect, prototypical emotional episodes, and other things called emotion : Dissecting the elephant. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 805-819.
- Russell, J. A., & Carroll, J. M. 1999a On the bipolarity of positive and negative affect. *Psychological Bulletin*, **125**, 3-30.
- Russell, J. A., & Carroll, J. M. 1999b The phoenix of bipolarity : Reply to Watson & Tellegen (1999). *Psychological Bulletin*, **125**, 611-617.
- Shah, J., & Higgins, E. T. 1997 Expectancy $\times$ value effects : Regulatory focus as determinant of magnitude and direction. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 447-458.
- Shah, J., Higgins, E. T., & Friedman, R. 1998 Performance incentives and means : How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 285-293.
- Strauman, T. J., & Higgins, E. T. 1987 Automatic activation of self-discrepancies and emotional syndromes : When cognitive structures influence affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **53**, 1004-1014.
- 竹村和久 1994 フレーミング効果の理論的説明 : リスク下での意思決定の状況依存焦点モデル 心理学評論, **37**, 270-291. (Takemura, K. 1994 A theoretical explanation of the framing effect : The contingent focus model of decision making under risk. *Japanese Psychological Review*, **37**, 270-291.)
- 田中あゆみ・山内弘継 2000 教室における達成動機, 目標志向, 内発的興味, 学業成績の因果モデルの検討 心理学研究, **71**, 317-324. (Tanaka, A., & Yamauchi, H. 2000 Causal models of achievement motive, goal orientation, intrinsic interest, and academic performance. *Japanese Journal of Psychology*, **71**, 317-324.)
- Torrubia, R., Avila, C., Molto, J., & Caseras, X. 2001 The sensitivity to punishment and sensitivity to reward questionnaire (SPSRQ) as a measure of Gray's anxiety and impulsivity dimensions. *Personality and Individual Differences*, **31**, 837-862.
- Tversky, A., & Kahneman, D. 1979 Prospect theory : Analysis of decision under risk. *Econometrica*, **47**, 263-291.
- Tversky, A., & Kahneman, D. 1981 The framing of decisions and the psychology of choice. *Science*, **211**, 453-458.
- Tykocinski, O., Higgins, E. T., & Chaiken, S. 1994 Message framing, self-discrepancies, and yielding to persuasive messages : The motivational significance of psychological situations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 107-115.
- Vallacher, R. R., & Wegner, D. M. 1987 What do people think they're doing ? Action identification and human behavior. *Psychological Review*, **94**, 3-15.
- Watson, D., & Tellegen, A. 1999 Issues in the dimensional structure of affect : Effects of descriptions, measurement error, and response formats : Comment on Russell and Carroll (1999). *Psychological Bulletin*, **125**, 601-610.
- Watson, D., Wiese, D., Vaidya, J., & Tellegen, A. 1999 The two general activation systems of affect : Structural findings, evolutionary considerations, and psychobiological evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 820-838.
- Wiener, N. 1953 *Cybernetics : or, control and communication in the animal and the machine*. New York : Wiley. 池原止戈夫[ほか]共訳 1962 サイバネティックス : 動物と機械における制御と通信 (第2版) 岩波書店
- Williams, J. M. G., Watts, F. N., MacLeod, C., &

- Mathews, A. 1988 *Cognitive psychology and emotional disorders*. Chichester, UK : Wiley.
- Wilson, G. D., Barrett, P. T., & Gray, J. A. 1989 Human reactions to reward and punishment : A questionnaire examination of Gray's personality theory. *British Journal of Psychology*, **80**, 509-515.
- Wilson, D. K., Purdon, S. E., & Wallston, K. A. 1988 Compliance to health recommendations : A theoretical overview of message framing. *Health Educational Research*, **3**, 161-171.
- 安田朝子・佐藤 徳 2002 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性の検討 心理学研究, **73**, 234-242. (Yasuda, A., & Sato, A. 2002 Development of the behavioral inhibition system/behavioral approach system scales. *Japanese Journal of Psychology*, **73**, 234-242.)
- 謝 辞
- 本論文を執筆するにあたり、ご指導・ご助言いただきました東京大学の市川伸一教授に心より感謝いたします。
- (2003.3.13 受稿, '04.2.2 受理)

The Three Dimensional Framework of Positive and Negative Goal Representation

KOU MURAYAMA (DEPARTMENT OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TOKYO)
JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2004, 52, 199—213

There has been little agreement as to the definitions of positive (approach) and negative (avoidance) goals. To clarify these definitions, this review introduces a framework for positive and negative goals in which 3 dimensions (reference, achievement, and outcome) are identified and defined strictly. To confirm the usefulness of this framework, the following was done : (a) The framework was applied to various research areas, including control theory, achievement goal theory, goal-framing studies, and regulatory focus theory. (b) The psychological functions of the 3 dimensions were investigated. (c) Using the framework, 2 process models that could explain the effects of positive and negative goals on human behavior were constructed: a behavioral activation system/behavioral inhibition system (BAS—BIS) mediation model and an affect-mediation model. In this way, many problems with the definitions of positive and negative goals could be resolved.

Key Words : goals, approach-avoidance, achievement goal theory, control theory, regulatory focus theory